

# 1 村山大島紬の歴史 - 織りと染めのまち瑞穂 -

村山大島紬は、瑞穂町と武蔵村山市を中心に作られた絹織物です。多摩地域では江戸時代から養蚕や織物が盛んでした。絹糸は外国に輸出するために八王子や横浜へと運ばれました。織物は絹と木綿を織り交ぜた青梅縞や藍染め木綿の箱根縞などが織られていて、江戸時代から質の高い織物を生産していました。

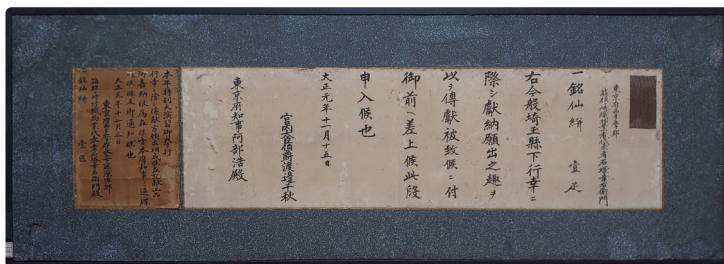
村山大島紬は、明治時代に多摩地域で作られていた木綿織物の村山緋と、太織など絹織物の技術がもととなっていて、地域の人たちは、より品質の高い織物を作り出そうと努力しました。そして、大正時代に群馬県の伊勢崎から緋板を使って糸を染める技術を学び、絹織物である村山大島紬が完成しました。

村山大島紬の特徴は、緋板を使ってたて糸とよこ糸を染める、板締染色という方法が使われていることです。このため、一つの織物を作るためには、緋板を彫ったり糸を染めたりする職人、染めた糸を機織り機に準備する職人、機織りや検査をする人など、多くの人の手が必要でした。そのため、瑞穂町や周辺の地域では、村山大島紬に関わる仕事をしている人がたくさんいて、残堀川では染めた糸を洗う人々が集まり、街中では機織りの音が聞こえたそうです。

村山大島紬は高い技術が評価されて、昭和42年(1967)には東京都無形文化財、昭和50年(1975)には、通産大臣(現在の経済産業大臣)指定の伝統的工芸品に認定されました。



箱根縞の着物



銘仙緋献上額

大正天皇の埼玉行幸に際して献上され、村山大島紬のもととなった銘仙緋。